

口紫

唇が腫れておるの厭わず口付けると仰る。けれどもその腫れちゅうのが徒事でない故、思わず知らず肌が粟立くって来。

夫は四十前の男盛りとでもいう年頃だが、全体的にほっそりとして、顔立は端整、色の白さといったら寧ろ女性的で、それだけにその唇病際立つ。冗談で拵おこえられた合成写真のよに、そこだけ紫にくつきりと浮いておる。

上下に薩摩芋寝転がしたよな太唇で、上っ側や口角にはめきめきと動脈じみた筋が卍巴と迸る。下側にはそれに加え、小指の爪ほどのおできがふたつ、双生児の如く対称に並んで居って。

土台の紫部と違っておでき等の表面にじゆくじゆくした様子は見受けられず、寧ろそこ等は焼きたてパイ皮の様、薄白い濁り、触れたらぱりと

音立てそな風、實際夫触れたが為に悪化した。

しばし何てことなく過しておったのが、書き物していた夜のこと、ふと魔が差し、鉛筆芯でおできを突付いた。削られたばかりの芯は垂直に触れただけで焼きたてパイ皮をひび入らすに充分であり、想像に違わぬ小気味よい音立ったという。その後は力加えずとも内からもきもき卵孵るよに亀裂入って来、産まれたのは妙にねばとした汁入り混じる血の塊で。

そのぱり、いう感触が堪らず小気味よく、今一度味わいたい所存片割にも芯刺した。ひどくなるだろうとは当然思うたが、その頃にやあどうせ近い内治るものと高を括っておった、滅多逢えるものでなからうと、今の内いじれるだけいじっとこ、そんな言訳繰り返して早ひと月、治るどころでない、始めより粒は倍に腫れ上りそれ等取巻く血管筋は蜘蛛巣の如き体。近頃は余りの見苦しき故人

前ではマスクを着ける。

それでも懲りてはおらぬよう、外ではどうか知らぬが家に居って手が空いている時なぞ誘惑にかられるのだらう、目がぎよろぎよろ尖ったもの探す有様。幾度となく医者勧めても、仕事だなんだと口実もつけ、治すのがちと惜しい心持見え見え。

でもその気持わからぬでもない。近頃あたくし、夫がマスク外す刹那そわそわ心待ちにしておる己に気付いた。あのぷくり腫れた豆のよなものは、ぱっと見の忌わしさ越えると、俄かに人惹きつけ出す、それもこうむらむらと、見るものの、強弱の違いさえあれ、誰の奥底にもある、何か虐げたい欲をいい具合にそそりよる。

がしかし今夫は、そのおでき等ごと病気の唇に口付けると仰る。となると話は別、だって唇は死人のみたよな紫で、特に上っ側、頻りにべろで嘗

め回される所為か始終ぬめと湿りてかりおる。そうしてまた無気味なのが表面保護するよに張り巡らされた血管筋等、もの言う度はたまた呼吸にすら連れ紫上を引っ攣れるのたうつ、さながら死にかけのみみず体。

そんなものに愛情のしるし接吻を施すなんざ無理無体、されども出来ぬとは言えぬむうど霧困気、増してや伝染りそうだなんととても、とても。

もしか口にしたらあだし、札やら家の権利証やら束にしたもんで横っ面張り飛ばされる踏付けにされる。そうして夫どこぞに雲隠れすること必至。そうなたらいつもの気紛れと違い故意に頑なに、当分帰ってはこないだろう気がする。

しかしこないな気色悪い面、果して別宅は受入れるのだから。でも大勢いるから、その内のひとり位いかもの好きが居るのやも知れん。だからこそ夫、強気であたくしを試してくるのやも知れん。

愛情示してくれぬなら出て行こかと、目はからかうように嘲るように笑っておる。ま、どっちにしろ終りまで面倒だけは見ちやるがな、と言いた気なのは、懐からちらうちら札束覗かす、イヤらしい長い指どもで。

あたくしは夫に何所にも行ってほしくない、となれば一所懸命愛を示す他ない。近頃折角居着いておるのだから、それが病氣故であろうと何だろと構わない、手ばなすべきではない。ふらふら何所ぞへ参れば、またおかしげな出来物拵おくりえてくること請合い、今度は指にか、股にか、また口か、はたまたへそか、うなじか、或は顔面背面それとも全身。

何にしろあたくし、一所懸命引き留める他ない。ソファに深々座る夫の膝間に割って入り、見上げると改めてどうして、生っ白い顔の内うちで唇ばかりはくつきり紫、なのにその更に内の二つの脹ら

みは乳溶かしたよな白色で。そこ等は無邪氣に明るく見える、しかし薄っすらと透ける中身は土台に劣らず毒々し気な赤色の濁り。表面の乳白色の薄皮はさながら赤毒閉じ込めておるカプセルの様、瞬きの度赤が増、増、なみなみ満つる、引く、また増。

それに関らぬよう怖々小分けにぐるりを吸い出すとアレ旦那は大層ご立腹で。もっと氣イ入れてやれやと、あたくしの首根っこ引つつかんでのけ反らす。

息苦しさにくらくらなりながらもあたくし目が離せぬ。赤い点覆う乳白色の膜に、何かに憑かれてもしたよう、見入らずにおれなんだ。

思わず爪刺したら、ぱりとひび入り、もこもこした紫口があ、と開くや喉元への圧迫感は消えた、ひびから赤がねっとり滲み出覆われていた膜をみるみる覆い返す。

そうかやりたかったのか、もひとつやればええ
がなほれと、美貌の顔内で不自然に下品な口紫、
連立つ蛞蝓の如きなくなした蠢き。

恐れながらも退く^ひつもりあらず、今一度と八重
歯突き立てると血の味やぬめりよりも一層際立
つ、それというのは恐らく入り混じる透明の汁の
で。味というよりその生臭さ粘っこさに、一度た
りとして触れれば病付、我忘れ患部全体にむしゃぼ
りついた。

数日するとあたくしの口に病状が表れ始めた。
こちらの唇腫れ上るにつれ夫のは見る間に引い^ま
ていき、あれだけじりじりと患っておったのが嘘
のよう、やがて元のすっきりした形のよい唇に治
っていた。

ふたりの病状が逆転する頃から薄々感付いて
はおったが夫はあたくしに近寄ろうとしない、寄
っても避ける、全快して少し経つと到頭卓に札束

あらわれ夫の姿が何所にも見えぬ、それきり帰る
気配もない。

他に伝染す当てとてなし、あたくし部屋でひとりきり、新札のひと角唇おできにおっ立てて、夫の帰りをひたすらに待つばかり。